

とある鬼滅の幻想殺し

榛猫(筆休め中)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

舞鶴鎮守府にて提督をやっていたツンツン頭の青年、上条当麻はある日を境にその姿を消す。

上条当麻は何処へ飛ばされたのか、そして、上条を待ち受ける運命は……!!

目次

幻想を殺す男	1
始祖と幻想	7
鬼化と幻想殺し	15
鬼殺の剣士と幻想殺し	21
鬼殺隊と幻想殺し	26
野良鬼と幻想殺し	30
天狗面と幻想殺し	36
狭霧山の修行	39
呼吸法と岩斬	42
山斬と兄弟子と	47
選別資格と幻想殺し	53
手鬼と幻想殺し	56
手と刀と幻想殺し	59
選別終了	64
兄妹の再開	68

幻想を殺す男

「つてて… たたく、いったい何が起きてんだ？」

俺の名前は上条 当麻。学生の頃、学園都市という化学の街から艦娘を従える提督という立場になった男である。

そんな俺は、何故か不幸に愛されながら生活している。

それは何故か、例えば……………。

携帯を探していて、その最中に落ちていたキャッシュカードを踏み砕き……………

冷蔵庫が壊れ、その中身が全滅していたかと思えば、非常食のカツプ焼きそばを流しに誤ってぶちまけ……………。

部下の艦娘に用があつて尋ねれば、着替えの真つ最中で殺されかけ……………。

「拳句の果てには見知らぬ雪山の中…………… はあ、不幸だ…………… クシツ!!」

にしたつて寒い…………… 寒すぎる……………。

こんな雪山の中この格好提督服じゃ寒すぎる…………… 凍死するわ…………… !!

「けど、どうすりゃいいんだ？」

こう雪が深いとどつちに進んだらいいかも分からない……………。

「これ…………… 本格的に不味いんじゃないか…………… ?」

内心、かなりの焦りが出てきたところに、その声はかけられた。

「あれ? 大丈夫ですか? こんなところでどうしたんです?」

その声に振り返ると、そこには緑と黒の市松模様の羽織を纏った髪や瞳に赤が混じった少年が立っていた。

それよりも目に付いたのが、少年の左額に大きく付いている目立つ赤い痣、それと耳から垂れている太陽の絵らしきピアス? が印象的だ。

「あ、えつと… ちよつと遭難してしまつたみたいで… 帰り方が分からないんだ」

隠すような事でもないし、とりあえず話せることは話しておく。

「そうだったんですか!? それは大変です!! この時期は本当に寒いですから一度家に来てください!!」

俺の事情を知った少年はすごい勢いで話し始めた。

その勢いにたじろいでしまい…………。

「い、いやでも…」

「大丈夫です!! 家族もきつと迎えてくれます!!」

そう言う俺の手を取り有無を言わせぬ口調で俺の手を取り歩き出した。

「ちよつ… お、おい…」

これは俺の話を聞いてくれる感じじゃないな…。俺より年下なのに頑固な奴だ…………。

俺はされるがまま、その少年の後を着いていくのだった。



「母ちゃん、ただいま」

俺が連れてこられたのは先程の場所から少し歩いたところにある小屋だった。

中には母親らしき女性と数人の子供がいた。

「あら、おかえり炭治郎」

「おかえりなさい、お兄ちゃん。．．．と、そちら人は？」

その声の方を見ると、長い髪の数か所を部分的に結んで額を出し、麻の葉文様の着物に市松柄の帯を締めた少女がいた。

その姿は可愛らしく、まだ幼いというのに大人っぽさを秘めている。

「彌豆子、家の近くで遭難してたんだ。この雪の中じゃ大変だから、連れてきたんだよ」

「遭難!? こんな雪の中で遭難するなんて．．．」

「よくご無事でしたね．．．。見たところかなり身分の高そうな方にお見受けしますが．．．．．」

母親らしき女性が俺の服装を見ながら問い掛けてくる。

「あ、そんなことないです。見た目だけが良かっただけの服ですから」

鎮守府の大将なんて飾りだけの名前だしな．．．．．。

「そうだったのですか．．．? このままという訳にも行きませんし、今日はお泊まりになってください」

女性の提案に俺は驚きを隠せない。

「い、いいんですか!? こんな素性も分からない男なんか泊めて．．．」

自分で言うのもなんだが、今の俺、かなり浮いてるし怪しいはずだし．．．．．

．．．．．言つてて悲しくなってきた。

「大丈夫です!! 例え素性が分からなくても、困ってる人を放つてはおけません!! それに、お兄さんは優しい人．．．そんな気がするんです」

ネズコ、そう呼ばれた少女が優しく、しかし強く言い切る。

「そうですよ!! 禰豆子の言う通り、この雪の中で追い返して、何かあったら大変です。冬の雪山は冬眠に失敗した熊が人を襲うこともあるんです。そんな中に追い出すほど腐ってませんよ」

母親らしき人が同意するようににつづける。
.....
本当に、いいんだろうか

「いいん... ですか? 本当に...」

「はい!! ぜひ泊まって言ってください」

そう話す少女、禰豆子は花のような笑みを浮かべた。

「ご迷惑でないなら... お世話になります」

ここがどこかもわからない俺は、その言葉に甘えることにした。



その後、俺は一家、竈門家の皆さんに話を聞きながら、自己紹介をした。

それで分かったことが一つ、どうやら俺はタイムスリップをしてきたらしい.....

竈門家の皆さんはこの山、雲取山というところに住んでいるらしく、炭焼きの一家なんだそうだ。

住人は上から...

竈門 葵枝さん

竈門 炭治郎くん

竈門 禰豆子ちゃん

竈門 竹雄くん

竈門 花子ちゃん

竈門 茂くん

竈門 六太くん

となっている。父親の、竈門炭十郎さんは少し前に病気で世界してしまつたらしい……………。

父親の代わりとして、今は炭治郎くんが兄弟の面倒を見ているそう
だ。

「じゃあ、俺はもう一度町に行つてくるよ」

そう言つて耳飾りの（ピアスと聞いたら首を傾げられた）少年、炭
治郎くん

「あら、また？さつき行つたばかりじゃない？」

葵枝さんが不思議そうに問いかける。

「さつきは上条さんが大変だったから慌てて連れてきて、行きそびれ
たんだ。暗くなる前に行つてこないと」

「そう… ありがとう炭治郎… 気をつけてね」

「うん、じゃあ上条さん。また後で!!」

「あ、おう… ありがとな、なんかごめんな？迷惑掛けちまつて…」

「いえ、そんなことないです!! じゃあ、行つてきます」

そう言つて炭治郎くんは炭の大量に入った籠を背負い、この雪の中
を出掛けて言つた。

「凄いですね、こんな雪の中で行くなんて」

出ていった炭治郎くんの背中を見送り、俺はポツリと呟く。

「ええ、あの人が亡くなって… 本当に頑張ってくれています…」
そう話す葵枝さんはどこか申し訳なきそうにしている。
子供たちにあまり負担をかけたくないんだろうな。親心としては
複雑だろう……。

「よし!! 今日俺が手伝いますよ!! 家事でもなんでも好きに使っ
てください!!」

「えっ…? いえいえ、お客さんにやってもらうなんてそんな…」

「大丈夫です!! 炭治郎くんがいない今、男手はいた方がいいですか
ら!!」

体力や力には自信がある。なんたってあの鬼畜師匠達に散々扱か
れてそれはもう余りに有り余っているほどだ。

「……そこまで言うなら、お言葉に甘えて…」

葵枝さんが渋々といった様子で了承してくれた。

だが、俺は忘れていた。俺はどんな幸福をも消し去ってしまう不幸
持ちだということを……。

「ぎゃあああああつ…!!不幸だあああつ…!!」

その日、雲取山に俺の絶叫がなんども響き渡った……

しかし俺はまだ知らない。

これから、訪れる最大の不幸がやってきていることを……

始祖と幻想

side 上条

竈門さんの家でお世話になったその日の夜。

俺は寝つけず貸してくれた布団に寝転んでいた。

日中に（足を引っ張りながらも）竈門さんたちの手伝いをしていたから疲れは溜まってるはずなんだが……

なんだかさつきからなんか、すごく胸騒ぎがする……

そうして転がっていると、小屋の外から感じたことのある気配が漂ってくる。

殺気だ…… しかも、酷く濃厚な

「……」

俺は無言で立ち上がり、玄関の方へ向かう。

「あれ？ 上条のお兄さんどこ行くんだよ？」

竹雄くんがそれに気が付き、声をかけてくる。

「竹雄くん、皆も…… 今から絶対に外には出てくるなよ……？」
それだけを告げると、俺はそのまま外へと飛び出した。



外に出て少し走ると、そこには男が立っていた。

外見は人に見える…… だが、放つ存在感は別物だ。

まるで、深海棲艦の姫級と対峙しているような……

整った容貌に洋風の服装、青白い顔色をしている。

だが内に秘めるものは、人や鬼級や姫級ともかけ離れている。

こんな奴が竈門家に行けばどうなるかなんて簡単に想像がつく。
コイツを近づける訳にはいかない…………

「何者だ、お前は…………」

「知るかよ、お前こそなんだ…………」

男の言葉を無視するように俺は問いを投げ掛ける

「黙れ、私の邪魔をするというのなら…………死ね」

濃密な殺気が、俺へと注がれる。

それくらいの殺気は師匠や姫級との戦いで飽きるほど受けてきた。
集中。拳に力を込め、精神を落ち着かせる。

これから先は一つの油断ですら死を招くだろう。

気を引き締め、目の前の男をしっかりと睨みつける…………

男の身体が蠢いている。

——来るな…………

刹那、男は、背から伸ばした『管』を此方に振るう。

葵枝さん達を、ひいてはを竈門家の人達殺されては堪らねえ…………

「シツ…………!!」

襲い来る管を躲し、脚に力を込め、男目掛けて高速で走り出す。

「おおおッ!!」

一撃を躲され、隙を晒す男へ、俺はその懐に飛び込み、拳を構え、高速で突き出す。

驚愕の表情、今更驚いたって遅せえ…………

「あつ!! あーたたたたたたたたたた——つ!!」

高速で突き出される俺の拳が男の全身を突いていく

『棲艦 爆裂拳』

水鬼師匠に教わった棲艦鬼拳、その暗殺拳の一つ
拳を連続で相手に突き出し、秘孔という名の急所を突くといった連
続技だ

「なんなんだ今のは… そのようなモノ、蚊ほども効かんが…？」

「そうか、お前はもう、死んでいる」

男の不適なその笑みと言葉に、俺はそう返してやる。

やり取りにもなっていないが、この男ともうこれ以上話す必要はな
い。

「なんだと…？ つ…！?ぐっ…!!」

『ボコオツツ!!』

直後、男の身体が膨れ上がり弾け飛んだ。

辺りに血が飛び散る。

残った下半身がバタリと倒れる…

「……………」

それを確認し、俺は背を向ける。

悪党に零す慈悲なんかいらぬ…

これで終わりだ。俺が小屋に戻ろうとしたその時だった。

「上条の兄ちゃん!! 後ろ!!」

小屋から叫び声が聞こえ、俺は慌てて後ろを振り返ろうとする。

しかし振り返る直前、俺は背中に強い衝撃を受け、吹き飛ばされて
しまった。

「ぐっ…!!があああああつ…!!」

吹き飛ばされた俺は、勢いよく木々に叩きつけられ動けない

「よくも… よくもやってくれたな…」

憤怒の表情で男が話す。

「まさか、鬼狩りでもない、ただの人間に、しかも拳で身体を破壊されるとは……………」

まさか…………… 再生…………… したってのか……………？

しかし内側から内臓ごと破壊されたからか、その足取りはフラついている。

「忌々しい…………… この場で殺しておきたいが…………… この身体では……………」

そうして男は俺ではなく小屋の方へ足を向けた。

まっ…………… ず…………… このままじゃ……………

「ま…………… て……………」

必死に身体を動かそうとするが、受けたダメージが大きすぎるのか、体が言うことを聞かない

「そこで見ている、この家族が殺されるところをな」

男はフラつきながらも小屋へ足を踏み入れ、姿を消した。

「逃げて!! 姉ちゃん逃げて!!」

そんな声が聞こえてくる。

ちく…………… しょう…………… ち…………… くしょう…………… !!

「な…………… で……………」

悔しさと怒りが湧き上がる。

痛みを無視して俺は立ち上がり走っていた。

小屋の中は血まみれで倒れる無残な姿の竹雄くんや葵枝さんの姿があった……………。

「……………」

「おおおおおおおつ…！！！！」

『バキイツツ!!』

拳を固く握り締め、高速で駆け寄った俺は右手で男をその勢いごと殴り飛ばした。

「っ?! なっ…!!?!」

勢いよく殴り飛ばされ、男は壁に激突する。
俺はそのまま男に覆いかぶさり何度も殴る。

「なんで…!!なんで殺した…!!」

殴って殴って殴り続けた。

管が俺を攻撃しようと殴ることを止めなかった。
痛みなど感じることに無いほどに、俺は怒り狂っていた。

「こんな優しい人たちを…!!なんで…!!」

「ぐっ…がっ…!!離…せっ…!!」

凄い力で吹き飛ばされそうになるが、俺はそれを押え込み、さらに殴りつづける。

再生するならコイツが死ぬまで殴り続けてやればいい。俺の鍛えられ方は並の人間などとは程遠い……………。

迫る複数の管を左手で掴み、そのまま引きちぎる。

右手は男の顔を殴り続けていた。

男は離れようと藻掻くがそれを俺はさせない。

そして殴っていて気がついた……………

右手で殴ったところが、再生しなくなっている…? ?

何度も何度も右手で殴っていたこともあり、男の顔は血が滲み顔の

形が変わり始めていた。

さつき爆裂拳を喰らわせたときには再生したつてのに……

まさか、幻想殺しが効いてるのか……？

そう思い、男に右手を触れ、俺はあることを試す。

「艦鬼手刀斬……!!」

俺は左手を手刀に構え、男の額を力強く叩く。

「がっ……うぐっ……!!」

顔面に深い凹みが出来、血が噴き出す。

だが、再生は始まらない。

男は何が起きたか分からない様子だ。

これだ、これならコイツにダメージを与えられる。

訳が分からないという顔をして、恐怖を顔に出している目の前の男に俺は問いかける

「なんで……どうして殺した……？」

「人を殺して楽しいのかよ……。面白いのか……？ 命を愛しいと思っただけでも無いのかよ……!!」

何のためかなんて分からない……

けれど、こんな優しい人たちを殺した……

多分、葵枝さん達以外にも殺してるんだろう……

見て、その生命力を肌で感じて理解する。

十人か、百人か…… 或いはそれ以上か、どっだけ殺しているかも想像もつかない。

そんな問いだったが、奴からの返事はない。

ただ俺への恐怖に顔を歪め、逃げようともがいているだけだ。

「人の命を……なんだと思ってやがる……」
ふざけるな……

恐怖を、恐ろしいと思う感情を知っておいて、他人のそれは無視するお前に……

お前はなんだ。

「お前が……そんな風に人を殺すことをなんとも思わないで生きていけるってなら……」

「まずは、そのふざけた幻想ごとお前をこの右手でぶち殺す……!!」
存在していれば、常に人が脅かされることになる。
だからここで確実に殺す。

躊躇はしない。

優しさなんか必要ない。

このままここで、俺が殴り殺す。

触れる右手を左手に変え、右手を振りあげたその時だった……!!

「鳴女ええええええ!!!」

男が叫んだ瞬間、奴の背後に襖が開いた。

同時に男の身体が膨れ上がり、弾け飛んだ。

「なっ……!?!」

大小様々な肉片が全方位に飛び散り、俺はその勢いに乗せられ吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた俺は、小屋の壁に勢いよく打ち付けられる。

弾け飛んだ肉片の一部が襖の中へと消えていく。

このままじゃ逃げられる……!!

「まっ……待ちやがれ……!!」

後を追おうにも、攻撃を受けすぎたのか身体は少しも言うことを聞いてくれない。

そのまま肉片は襖の中へと消えていき、やがて、襖は音を立てて閉まり消えていった。

「く…そ…たん…じ…ろ…く…ごめ…」
守れなかった…

そんな悔しさを内に宿しながら、俺の意識は深い闇の中へと落ちていった。

鬼化と幻想殺し

side 炭治郎

幸せが壊れるときには… いつも、血の匂いがする

なんで…。

なんで、こんなことになったんだ…。

俺は炭を売りに町へ行っていた。

炭を売るついでに、町の人達の頼みを聞いていたら、いつの間にか遅くなってしまい、日が落ちて暗くなってしまった。

(遅くなっちゃまった…。早く帰らないと)

そう思つて足を早め、急いでいたのだが、その途中で三郎爺さんに呼び止められ、泊まつていけと強い調子で言われ、渋々泊まることになつてしまった。

夕飯をご馳走になり、布団を借りて眠りにつく。

眠りにつく中で俺は三郎爺さんの言っていた鬼の話を考えていた。

その時は信じていなかった…。鬼が、本当にいるなんて…。

翌朝、荒らされた家と家族の無惨な姿を見るまでは…。



「クンツ…っ!? 血の匂い!!」

家に近づくと、先から血の匂いが漂ってきた。

漂ってくる先は間違いなく家の方…。

嫌な予感… それにすごい胸騒ぎがする!!

俺は急いで家の方へ走り出した。



家へと辿り着いた俺は、眼前に広がる光景に固まっていた。
それは、家の出先に家族が血塗れで並んで転がっていたからだ。

「——っ…?!?!?」

「どうしたっ?!? どっ…どうしたんだ?!?!?」

「いったい…何が…どうして…こんな…!」

並んでいる転がされている家族を見る。

皆目は瞑っているものの、その姿は惨い…。

なんでこんなことになったんだ…!!

熊か? 冬眠出来なかった熊が出たのか…?!?

「母ちゃん、花子、竹雄、茂、禰豆子、六太…」

「いったい…誰が、こんな…」

混乱する頭を必死に落ち着かせようとして、気がついた。

《ザクツ… ザクツ…》

近くから物音が聞こえてくる。

「——っ!!」

誰だ…まさか、家族を殺したやつがまだ近くに…!!

恐る恐る音のする方へ近づいていく。

そして小屋の影から少し顔を覗かせ、様子を伺う。

「……………」

《ザクツ… ザクツ…》

そこには、同じく血塗れで円匙えんしを構えて穴を掘っている上条さんの姿があった。

「か……みじよ……さん……？」

なんで……あの人が……生きて……。

「……………炭治郎くん……」

俺の声に気がついた上条さんが……近づいてくる。

まさか、そんなはずない……。だって上条さんが……家族を……そんなこと……あるはず……

そんな俺の思いなど知らず、上条さんは死んだように暗い表情で俺に近づいてくる。

もし、上条さんがやったなら、今度は……俺を……

もしそうなら、そうなる前に……仇を……!!

混乱する思考の中、上条さんが俺の前で立ち止まる。

そして……

「ごめん……!!!」

倒れるように勢いよく地面に両膝を着き、頭を落として謝ってきた。

「ごめん……!!ごめん……!!炭治郎くん……俺、葵枝さんたちを……君の家族を……守れなかった……!!」

「……………つ!?へっ………?」

その様子に、訳が分からなかった。

どうして上条さんが謝るんだ?上条さんが殺した訳じゃ……ない………?

なんで、守れなかった…なんて…
混乱する俺を置いて、上条さんは話し出す。

「昨夜、変な男が家に近づいてきてたんだ…」

ポツリポツリと、上条さんが昨夜のことを話してくれた。

日が落ちて暗くなってから、謎の男が来て、上条さんがそれに気がついて相手を迎え撃ったこと。

一度は倒したはずのその男が、何故か生き返って上条さんに攻撃してきたという。

攻撃を受けた上条さんが動けないところで、男は家族を殺していったのだという…

家族が殺されるところを見せつけられた上条さんは力を振り絞って男に殴りかかったらしい…もう少しで殺せそうだと思っていたところで変な襖に邪魔をされて出来なかったという…

「…俺も、そのすぐ後で気絶しちまって…目が覚めたのは少し前なんだ…。せめて埋葬してやりたかったから、家に置いてあったシャベル借りて、穴を掘ってたんだ…」

そこに俺が帰って来たのか…

しゃべる…というものが分からないけど、円匙で穴を掘ってくれていることは分かった。

「ごめん…本当に…ごめん…」

匂いでわかる…

上条さんは嘘はついてない。

家からは、上条さんではない、別の匂いが残っていた。

きっとこの人は、本当に家族を助けるために立ち向かって。戦ってくれたんだ…

本当に悔しそうに謝る上条さんを、俺が怒れるわけが無い。

「…上条さん、顔を上げてください」

「…………ごめん……ごめんなさい……」

けど、上条さんは顔を上げてくれない。

「大丈夫です。大丈夫ですから、顔を上げてください……………」

そうやって俺は上条さんの顔を上げてやる。

「!! けど、俺は……」

「上条さんが俺の家族を守ってくれようとしたことはよく分かりました。今だっってこうして家族のために泣いてくれている。その気持ちだけで、十分です」

「炭治郎くん……」

「…………家族を埋めてましよう。このままじゃ可哀想だ」

いつまでも家族をあのままにはおけない……………」

放っておいたら、野犬達が食べに来るかもしれない

蹲る上条さんを立たせ、俺は家族の元へ向かう。

そして、気がついた……。

気がついて……しまった。

禰豆子の……禰豆子だけが、僅かに息をしていることに……………」

「!! 上条さん!! 禰豆子が!! 禰豆子はまだ息があります!! 生きてる……生きてるんだ!!」

「なっ……嘘だろっ……!?!」

上条さんも慌てて禰豆子に駆け寄り、慌てて確認する。

「………… 本当だ、微かだけど息がある」

「上条さん!! 直ぐに医者にみせましょう!! まだ!! 今ならまだ間に合うかもしれない!!」

「あ、ああ!! じゃあ俺……が……」
そんな時だった……

《……ピクツ》

《ピクツ ピクピクツ……!!》

突如、禰豆子が起き上がり叫んだ。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!』

その様はまるで獣のように荒々しく、鋭い目付きで俺たちを睨みつけていた。

鬼殺の剣士と幻想殺し

side 炭治郎

『グオオオオオオオオオオオオオツ!!!!』
いきなり起き上がった禰豆子が獣のように吼え、俺と上条さんを睨みつけてくる。

「ね、禰豆子ちゃん…？どうしたんだよ…今動いたら…」
そういつて上条さんが近づこうとした時だった。

「ツ…!!グアウツ…!!」

「なっ!? ぐうっ…!!」

突如、禰豆子が上条さんを蹴り飛ばし、俺の方へと飛びかかってきた。

「禰豆っ…くっ…!!」

持っていた斧を慌てて眼前に構え、飛びかかってくる禰豆子を辛うじて抑える。

しかし、勢いがついてきた禰豆子に俺は押し倒される。

斧の柄を口から生えた牙で加え、俺の両腕を凄い力で掴む禰豆子の両腕…。

その様は、まるで鬼だ。

三郎爺さんが言っていた鬼そのものだった…。

禰豆子が…人喰い鬼…？

いや、違う。禰豆子は人間だ。生まれた時から

だけど匂いが、いつもの禰豆子じゃなくなってる!!

でもあれは禰豆子がやったんじゃない!!

禰豆子は六太を庇うように倒れていたし、口や手に血は着いていなかった。

それに、上条さんが言っていた男のこともある。
それが、家で感じたもう一つの匂いの……家族を殺した犯人!!
そこまで思い至ったところで、状況が動き出した。
彌豆子の身体が、ズンズンと大きくなり始めたのだ!!
身体が大人の女ほどに大きくなり、力も更に強くなった。
駄目だ、全然押し返せない!!
その時だった。

「はあ、なんて言うか、不幸だ……」
そんな声が聞こえた直後、ふと、俺に掛かる重さが急激に軽くなっ
た。

なんだ? いったい、なにが……。
よく見ると、彌豆子が上条さんに捕まっている。
まるで犬の散歩でもするように、簡単に片手で捕まってい
た……。

「危ないところだったな、大丈夫か? 炭治郎くん」

「……………ムー」

後ろでその両手を抑えられ身動きの取れない彌豆子は、何故か暴れ
ることなく落ち着いている。

「アイツに効いてたから、もしかしたらと思ったけど、やっぱり効いて
くれたか……」
まるで何かを知っていたこのように左腕で胸を撫で下ろす上条さ
ん。

「か、上条さん……ね、彌豆子は……」

「大丈夫、なんともねえよ」

抑えられ、大人しい彌豆子を見て上条さんが優しく見つめる。

その時だった。
上条さんの背後から
迫る人影が……!!

俺は咄嗟に叫んでいた。

◆◆◆ side change ◆◆◆

「上条さん!! 後ろ……!!」

炭治郎くんが青い顔をして俺に叫ぶ。

しかし俺は気がついていたら、足音を消して近づいてくる奴がいることを……。

その人影が真後ろに迫って来たことを察知し、自然な動作で左腕を背後に迫り来る相手に手を伸ばす。

《ピタッ》

伸ばした手を指二本にして構え、突き出すと、その指へ吸い寄せられるように刃が受け止められていた。

「!! なっ……」

件の曲者は驚きの表情をしている。

「おい、いったいなんのつもりだ? いきなりこんな物騒なもん振り下ろしてきやがって……」

俺は下手人を睨みつける。

この男、今明らかに禰豆子ちゃんを狙っていた。

「なぜ、邪魔をする……」

「そりゃ、こつちのセリフだ… 禰豆子ちゃんに手を出そうとしやがって… なにしに来やがった」

「えっ…!?!」

男の言葉に俺は睨みを効かせながら問い掛ける。
その俺の言葉に炭治郎くんが驚いた声を上げる。

「その少女は鬼だ。俺は鬼を狩る仕事をしている」

「鬼…?」

言われてみれば昨日までなかった牙や爪があるな… 確かに鬼にも見える…

「だからって殺らせるわけないだろうが、炭治郎くんの妹をむぎむぎ殺させるかよ」

「… 鬼が人を殺して食うと聞いてもか」

人を… 喰う…?

「… なに？」

「放っておけば、その鬼は目の前の兄を食い殺す。確実に」

「待ってくれ!! 禰豆子は誰も殺してない!! 俺に傷だっつけてないんだ」

男の言葉に炭治郎くんが食らいつく。

「俺の家にはもう一つ、嗅いだことのない匂いがあった!! みんなを… 殺したのは多分… そいつだ…!!」

「禰豆子は違うんだ!! どうして今そんなことになったのかは分から

ないけど、でも!!」

「簡単な話だ、傷口に鬼の血を浴びたから鬼になった」

鬼の… 違う… ?

「ちよつと待てよ。鬼… ? 鬼の血だつて? どういうことだ」

「…:…: 鬼の祖に血を浴び、それが傷口から体内に入った事で鬼になる」

おい、まさかあのクソ野郎が鬼の祖だつてのか… ?

「そうか、アイツが禰豆子ちゃんを… !!」

「…:…: どういうことだ」

「!! そうか、上条さんは犯人の顔を知ってる!! だから分かるんだ!!」

「なにっ…:…: !?」

その言葉に男の態度がガラリと変わったのを、俺は感じていた。

鬼殺隊と幻想殺し

side上条

「見たのか!! その鬼の… 鬼舞辻無惨の顔を!!」
そう声を荒らげる剣を持った男。

「…… そのきぶなんとかってのか知らねえけど、この子の家族が襲われる所は見た、それに戦った……」

「戦った… だと!?(ソイツの特徴は) どんな奴だった!! (どういう血気術をどんな) 戦い方をしてきた!?!」

おいおい、アイツの話聞いてからやけに騒がしいな……

「待て待て、その前に教えろよ、鬼つてのはなんだ、禰豆子ちゃんは鬼つて感じじゃねえだろ、角だつてねえし、何より赤くも青くもねえ……」

鬼つつつたらアレだろ? 金棒持って虎柄のパンツ履いて桃太郎とかに退治されるやつだろ?

禰豆子ちゃんはどうみたつてそんなのねえし……

「そんな(生易しい迷信的な)ものじゃない、古来より、夜に動き回り、人を襲い喰らつては、自身の腹を満たす。もつと醜く、残忍な化け物だ」

つまり、俺の知ってる鬼とは別物つてわけか……

俺が情報を整理していると、男が口を開いた。

「俺からも聞かせろ。お前、(その男と戦ったと言っていたな……) どうやって生き残った?」

「はあ…？いや、だから戦ったから…」

「それはもう知っている」

「イマイチ要領を得ない会話だな…。要するに、アイツと戦ってどうやって俺だけが生き残ったってことか…？」

「…分からねえ、奴に、大ダメージ与えて、一度殺してやったから…じゃねえの？」

「アイツ、なんでか復活してやがったし、フラフラだったよな？」

「っ…!?殺した…だと!!」

「さつきから驚いてばっかだなコイツ…。けど、今わかったことは二つ…。」

「鬼ってのは俺の知ってるやつじゃないってこと」

「人を喰い、夜に活動し、とある鬼の血を傷口に浴びると変異する」と

「あ、あと一つあったな。」

「幻想殺しが効くこと。」

「そのくらいか…。」

「…おい、そこのお前…」

「?…なんだ」

「情報交換をしよう、俺は戦ったアイツのことを教える。その代わりお前は知り得ることを全て教えろ」

「…わかった」

「悩むような素振りを見せた男だったが、やがて首を縦に降った。」

「よし、交渉成立だ」

彌豆子ちゃんのためにも、色々知つとかねえな……。



その後、情報交換した俺たちは、剣を持った男、富岡 義勇と別れ、狭霧山へと向かうのだった。

義勇からの情報によれば、彼は鬼殺隊と呼ばれる政府非公認の組織に所属していて、夜な夜な、鬼を狩り続けているんだそうだ。

鬼殺隊ってのは、鬼の始祖、鬼舞辻無惨を殺すためにある組織らしく、隊員の多くは家族や大切な人を殺され、復讐のために入った者が殆どらしい……。

日輪刀つっ―特別な刀を用いて鬼のクビ（首だか頸だか知らない）を斬らないと、鬼は殺せないらしい……

義勇が持ってた青い方がそうだって話だ……

そんな鬼殺隊に入る為にはそだて育手と呼ばれる者達に適正と基礎を教わらなければならぬらしい。

そして育手に認められることが出来なければ、鬼殺隊の最終選別には行けないんだそうだ……

話を聞いていた炭治郎くんは、鬼にされた妹の彌豆子ちゃんを人間に戻すため、そして…… 家族を殺した仇を討つために鬼殺隊にはいると言っていた。

それを義勇が自身の育手を紹介してくれた。

その育手に会うため、俺達はこれから狭霧山へと向かう。

彌豆子ちゃんは陽の光には当たれないため、夜中の移動が基本になる。

…… 生活リズムが狂っちゃうけど仕方ないか

これも炭治郎くんと、鬼になっちゃった彌豆子ちゃんのため…… !!

けど、彌豆子さん…… ? 寝る時に私わたくしにくつついて寝るのはどうか

ならないのでせうか……??
さつきからお兄さんの視線が凄く怖いのですが……

あははは……。

はあ、不幸だ……

野良鬼と幻想殺し

side上条

富岡 義勇と別れた後、俺達とはある家の前で家主の男たちと話していた。

「すみませんが、あそこの籠と藁、竹を少々頂けますか？」

「そりゃ、構わねえけど、籠は穴が空いてるぞ…？」

炭治郎くんが男と話す。どうやらあのデカイ籠が欲しいらしい。

ちなみに、今は彌豆子ちゃんはいない、昼間ってこともあって、彌豆子ちゃんには通り道にあった洞穴の中で待っていて貰っている。

「はい、お金を払います…。」

「いや、要らんよ。穴の空いた籠だぞ」

なんか……

「いえ、払います。」

「いやいらん、竹も藁もやるよ」

話、進んでないか…？

「でも、払います…!!」

いや、これは確実に…

「いやいらんて!!頭の硬い子供だな!!」

進んでないな…。なんだこれ…

「収めてください小銭ですがあつ…!!」

パアンツ…と、小気味よい音共に強制的に受け渡される炭治郎く

んの小銭。

「ありがとうございます!!!」

そのまま籠と竹と藁を貰い、走り出す炭治郎くん。

その後を追って俺も走り出す。

『痛つてえええ…っ!!』そう叫ぶ家主の声を聞きながら……。
なんか、すみません… 家主さん……



そのまま戻ってきた俺たちは、禰豆子ちゃんの待つ洞穴までやってきていた。

「禰豆子、戻ったぞ」

炭治郎くんが洞穴の奥に声をかける。

しかし、禰豆子ちゃんからの返答はない……

「あれっ、禰豆子？ いない…?!?!」

炭治郎くんが穴の中を覗き込み、叫ぶ。

「おいおい…まさかそんなわけ…」

そう言つて俺も覗き込む、確かに居ない……

おいおい…まさか外に出たんじゃ……

そう思い焦りそうになった時だった。

洞穴の下からひよっこりと禰豆子ちゃんが姿を現した。
どうやら、地面に穴を掘ったらしい……。

「あ、いた…!!」

炭治郎くんの間の抜けた声上がる。

「……………」

こちらを見る禰豆子ちゃんは見るからに不機嫌そうに顔を顰めている。

なんつーか、土竜みたいだな…………。

炭治郎くんも複雑そうだ…………。

「けど、炭治郎くん。それで何すんだ？」

「これですか？ちよつと見ててくださいいね」

そう言うのと、手際よく竹を割り、藁と竹を穴の空いた籠に編み込ませ補強していく炭治郎くん。

ものの十数分で穴の空いていた籠は立派な竹編みかごへと進化していた。

「こんな感じですよ!! どうですか？」

少しだけ誇らしげに、鼻高々に俺の方を見てくる炭治郎くんは俺は感嘆するしかなかった…………。

「いや、凄いな…!! 俺、そんなことできる気がしねえよ」

素直に凄いと思う、多分こんな俺たちの時代で出来るやつなんかそうはいない…………。

この時代だからこそ出来る器用さなんだろうな…………。

その後、補強した籠に炭治郎くんが禰豆子ちゃんを入れようとしたので俺たちで四苦八苦しながら（最後には禰豆子ちゃんが小さくなることで事なきを得た）やっとの事で籠に入れた。

そして、籠の上から大きな布を被せ、縛ることで昼間の移動も出来るようになった。

そして準備を整えた俺たちは再び狭霧山をめざして歩き出した。



「なあ、本当にいいのか？俺が背負わなくて…」

「はい！ 大丈夫です!! 上条さんに迷惑は掛けられないですから!!」

いや、そんなことないんだけどな……

「迷惑なんて思っちやいないし、ずっと背負ってんの辛いのか？」

「大丈夫です!! 禰豆子は俺の妹ですから!! 妹を重いと思ったことはありません!!」

頑として譲ろうとしない炭治郎くんに嘆息する。

けど、その気持ちは分からなくもない……。

唯一生き残った肉親を離したくないと思うのは、きつと悪いことじゃない……。

俺だって、父さんや母さん……どちらかが殺され、どちらかが鬼にされたとなったら、きつと死んでも離れないだろう

炭治郎くんの場合はそれが妹だったってだけの話だ……。

「わかった、けど、辛くなったら言えよ？何時でも変わってやるから」

「大丈夫です!! その気持ちだけ受け取っておきます!!」

……こりゃ、どうなろうとも譲る気はなさそうだな、まあいいか



日の落ちてきた中、道行く女性に狭霧山への道を尋ね、俺たちは先を急ぐ。

日が落ちれば彌豆子ちゃんを籠から出して共に歩いた。夜になり、辺りが夜の帳に包まれた頃……俺たちは山道にお堂があるのを見つけた。

「あつ、やっぱりお堂があるぞ、灯りが漏れてるから誰かいるみたいだけど、行こう」

「ふう……少しはここで休め……る……か……？」

俺がそこまで言いかけた時、俺は嫌な音を感じ取った。

炭治郎くんも何かを察知したのか足を止めている。

「炭治郎くん……悪いけどここで待ってる……」

「えっ……上条s」

炭治郎くんが言葉を発し切る前に、俺はその場を駆け出した。

お堂の戸を蹴破り中に入る。

そこにあつたものは……惨状だった。

その惨状を作り出したであろう下手人は俺を睨みつけている。

殺した人の腕を持ち、その口を血で汚しながら口を開いた……。

「なんだ……おい、ここは俺n「あたっ……!!」……なっ……!？」

コイツに、もう喋らせる必要なんかない……。

鬼の頭に両手の親指を両端にめり込ませ、秘孔をつく

「もういい……お前はもう喋るな」

《棲艦壊惨拳》

それは頭部の秘孔を突く事で、その身体を内部から破裂させ殺す暗

殺拳の一つ……。

水鬼師匠に教わったとんでも技の一個だ。

だが、これで死ぬわけがない、アイツが生き返ったなら、コイツも確実に生き返る。

ゆっくりと指を引き抜く……

「なっ…… 何しやがった!!」

慌ててお堂から飛び出し、俺から距離を離す鬼。

しかしその直後……!!

「お前は、もう死んでいる……」

「なあっ…… ぐっ…… ああっ……!! ひでぶっ……!!」

鬼はそのまま頭を弾けさせ倒れた。

後はコイツが再生する前に右手で触れ、そのまま目が昇るまで待てばいい……

それはそうと……

「そこにいるのは分かってんだぜ? いい加減出て来いよ……」

俺が鬼の身体に右手を触れたまま、お堂の近くの林に声を投げかける。

「……………」

そうして現れたのは、天狗のような面を被った男だった。

天狗面と幻想殺し

side上条

「……………いつから、気づいていた？」

木陰から出てきた男が問いかけてくる。

その素顔は天狗面に隠されており、素顔を伺うことは出来ない。

しかし、フードの下から覗く頭部を見る限り、その白さから歳を重ねており、俺たちよりも歳上だろう事は伺えた。

「外に出た時からですよ、炭治郎くん達とは別の気配を感じてた」

お堂を蹴破る前までは感じなかったから、その直後辺りに来たのだろう。

俺は右手を鬼に触れながらそう返す。

「……………色々と聞きたいことはあるが、それより……………」

そう言うのと視線が俺の下の鬼に行く男。

「ソイツはどうするつもりだ？」

「ああ、このまま朝まで待って陽の光で焼き殺してやろうかと。俺じゃ倒しようがないんで」

「……………再生していないようだが」

「まあ、そうっすね……………俺が触れてるんで」

今は詳しく話してる場合でもねえし手短に済ませる。

「……………そうか」

男はそれきり黙ってしまった。

そうこうしてるうちに日が登り、辺りが白み始めてきた。

破裂した鬼は為す術なく陽の光に晒されその身体を塵のように吹き消えていった。

「上条さん……さっきいったい……なにを……」

近寄ってきた炭治郎くんが訝しげに問うてくる。

「アレか？アレは俺の使ってる拳法だよ」

「けん……ぼう……？」

分かってない炭治郎くんに簡単に説明してやる。

「文字通り、拳で戦う戦い方のことだよ」

ま、俺のは拳法つつうよりも暗殺拳だけど……

「それより、貴方は誰なんですか？」

「…… 儂は鱗滝左近次、義勇の紹介はお前たちで間違いないな？」

鱗滝と名乗った男がそう聞いてくる。

そうか、アイツ……紹介してってくれたのか……

その横で炭治郎くんが口を開いた。

「は、はい。竈門 炭治郎と言います。妹は禰豆子で……そっちの人が……」

「上条 当麻です。あなたが富岡の言ってた育手の方ですね？」

「ああ、炭治郎といったか……。妹が人を喰った時、お前はとうする」
なっ……。!!この野郎、炭治郎くんになんてこと聞きやがる!!

「えっ……。？」

(パンツ!!)

答えられない炭治郎くんは鱗滝の手が飛ぶ。

「判断が遅い」

「なっ…!!」

俺が驚く横で鱗滝は続ける。

「お前はとにかく判断が遅い、今の質問に間髪入れずに答えられなかったのは何故か？ 妹が人を喰った時にやることは二つ。妹を殺す。お前は腹を切って死ぬ…。鬼になった妹を連れていくというのはそういうことだ」

「しかしこれはぜったいにあってはならない。儂の言っていることがわかるか」

しかし今度は炭治郎くんも間髪入れずに答える。

「はい!!」

「…… お前も分かっているな？」

次は俺か…？

「わかってますよ、禰豆子ちゃんには誰一人手を出させねえし、俺がさせねえ」

「…… では、これからお前たちを鬼殺の剣士として相応しいかどうかを試す。炭治郎、お前は妹を背負って着いてこい。上条、お前はそのまま着いてこい」

「ああ、分かった」

そうして、背を向けた鱗滝…さんを追って俺たちは走り出すのだった

狭霧山の修行

side上条

「はあっ… はあっ… はっ… なん… なんだよ… !!」

俺は現在、山の頂上から麓までの山道を駆け下っていた。

辺りは暗く、オマケに霧で辺りが見えづらい…

「深海の姉ちゃん達のところまで夜目に強くなって良かったぜ… 人間やめちまつてるようで悲しくなるけど…」

自分で言ってる悲しくなってきたので前のことに集中することにする…

俺がやっているのは、炭治朗くんが鱗滝さんの課題で狭霧山での課題をギリギリで突破し夜明け直前に帰ってきた後のことだ。

日が登り始め、辺りがうつつすらと白み始めた時間から俺は鱗滝さんと共に山の頂上へとやってきていた。

「お前にも同じことをしてもらおう、ただし、お前は早朝までに戻れ」

「… えっ…」

そう、言うだけ言うと、鱗滝さんは霧の中に消えてしまった。

「早朝までか… まあ、簡単だろ」

そう思っていた時期が、私にもありました…

「っ… —っ… !?」

走ってつた先で引つ掛けた縄から短刀が複数俺目掛けて飛んできた。

くくっ!! つぶねえ…

あの爺さん、本気で俺を殺しに来てる…

このままじゃ、間に合わないどころか… 串刺しだ… !!

「…………… 上等だコラ!!　そつちがその気だつてんなら、まずは!!この罨だらけの山をこの身体でぶち破る!!」
何がなんでも早朝までにたどり着いてやるからな——!!



あの後、なんとか小屋までたどり着いた俺だったが。その道中の記憶が曖昧だった。

空気が薄い中、アレだけ致死性の高い罨だらけなら意識も曖昧になる……………。

けど、そのおかげもあってなんとか鱗滝さんには認めてもらった。しかし、俺はしばらくやらなくていいと言われてしまいやることになかった……………。

鱗滝さん曰く、『お前は体が出来すぎている。そんな状態では走り込みの意味などない』だそうだ。

それならばと鱗滝さんが刀を振る訓練をさせてくれたが、俺には才能がないらしく、手から刀がすっぽ抜けて鱗滝さんを串刺しにしそうになった……………。

それ以来、鱗滝さんは早々に匙を投げ俺に刀を触らせてはくれなくなった。

そんなわけで俺はやることなく、日がな一日眠っている禰豆子ちゃんを見守るくらいしかなかった。

その代わりと言ってはなんだが、山の中を走り回っては野生の動物達を素手で殴り殺しながら狩りをして、その日の食料の調達をしたりしていた。

それもこれも、水鬼師匠達の地獄の特訓の賜物である。

…………… まさか、師匠達に感謝することになるなんて……………。

そんなことを繰り返しながら、炭治郎くんの鍛錬の様子を見守ってきた俺、そして、炭治郎くんに鱗滝さんからの、最難関の試練がやってくる……。

呼吸法と岩斬

side上条

一年、炭治郎くんが鱗滝さんの修行を受け始めてそれだけの月日が経った。

炭治郎くんは山での体作り、刀の振り方、呼吸法等の事を教わりそれを苦勞しながらも習得していった。

そして、一年経ったこの日、鱗滝さんに連れられ、新たな修業を言い渡された。

二人が小屋を出て言って少し、鱗滝さんだけが戻ってきた。そして俺を見て…………。

「当麻、お前にも次の修業を言い渡す」

それは、匙を投げられた俺に、新たな修業の始まりだった。

鱗滝さんに着いて歩き、俺も山の中へと入っていく。

「これからお前には、呼吸法を覚えてもらおう」

「呼吸法…ですか？」

それって、確か炭治郎くんが前に話してた、あれだよな？

鱗滝さんはそれを聞いて頷き

「そうだ、炭治郎には教えたが、お前にはまだだった。刀を使えない時点でこれらを使えるかも怪しかったのでな」

なるほど、そういう理由があったのか……………けど、それだと疑問が残る。

「どうして急に、俺に教えてくれる気になったんですか？」

すると、鱗滝さんは少し考えた後、話し出す。

「以前のことを思い出したからだ」

「以前…？」

いったいいつのことだろうか。

俺が一人記憶を探っていると……

「俺が初めてお前たちに会った時のことだ」

ああ、あのお堂の時の事か…!!

「あの時、お前はその身一つで、鬼を封じ込めていた。末端とはいえ、鬼が手も足も出ないのを俺は初めて見た」

まあ、鬼のボス的な奴を一度は殺す寸前までは追い詰められたし……。

「昔、噂で聞いたことがある。隊士の中に、刀を持たず拳と呼吸で鬼と渡り合った奴がいたと」

そんな奴が前にいたのか……

「それを思い出し、お前に呼吸法を教える。並大抵の修業ではないが、着いてこい」

フツ…… そんなのここに来る前から経験済みだ……

「……はい!!」

そして、俺の鱗滝さんによる呼吸法訓練がはじまった。

「全集中の呼吸…ですか？」

「そうだ、そして、十ある水の型を一応教えておく、拳で使えるかはわからんがな」

まあ、元々刀を使うこと前提だもんな……

「体の隅々の細胞まで酸素が行き渡るよう長い呼吸呼吸を意識しろ。」

身体の自然治癒力を高め、精神の安定化と活性化をもたらす
なるほど、鬼狩りにはこれが必須なのか……………。

「上半身はゆったりと、下半身はどっしりと構える」
言われた通りに俺は構えをとる。

「よし、呼吸！」

「スウウウウ!! ハアアアア… カハツ!？」
いきなり、腹部に強い衝撃がくる。

「違う！」
くはあつ… い、いきなり何しやがるこのお面ジジイ……………。

「次、型!!」
初めに軽く鱗滝さんに手本を見せてもらい、その型を覚える。

「こうだ、やってみろ」
へへ、こんなの前の師匠達に比べれば大したことない……………。
俺は見様見真似でその型を真似てみる。
しかし再び腹部を襲ういきなりの衝撃。

「違う!!」

「えっ… こ、こうですか?」

「違う!!」

「こうですか!!」

「違う!!」

その後も何度も喰らい、俺は腹を抑えて蹲るしかなかった……………
ぐおおつ……痛つてえ……………

その日から丸一日、俺は幾度となく鱗滝さんに殴られ続け、呼吸法の訓練に精を出した。

呼吸法訓練の次は、水と一つになればと無茶振りをされる。

そうして連れてこられたのはとある滝。覗くとかなりの高さがある。

おいおい、水と一つになれつて、ここから飛び降りろつてことか……!!?

いくらなんでそれは無茶&「早く行け」あつ……!?

「うわあああああああああつ……!!!?!」

いきなり背後から蹴りを入れられ、俺は真つ逆さまに滝壺へと落ちていった

次は行水だった。所謂滝に頭から当たるアレだ……………

冷たい……というより、勢いよく水が当たり過ぎてそれが痛かった……痛い程度ですむからまだいいんだが……………

ちなみに、炭治郎くんはアレで押し負け、溺れかけたらしい……………そんなことを続け、修業を終え小屋に戻り、炭治郎くんに話を聞いた。

なんでも、炭治郎くんは鱗滝さんから「もう教えることは何も無い」と言われたらしい。

そして、連れて行かれたのは巨大な岩だったそうだ。

鱗滝さんは炭治郎くんに、今までの教えたことを全て活かし、その岩を斬れと言ったそうだ。

しかも刀を折れば、炭治郎くんの腕も折るといふ、脅迫付きで……………

その話を聞いて、驚いた。無茶がありすぎると……………

刀は本来、岩を斬るために存在しない。

包丁や刃物もそうだ、アレらは固いものを斬る用途には造られてい

ない。

そんなのが斬れるのは余程の天災か、化け物喰らいだろう。

鱗滝さんは、ひよつとして炭治郎くんを合格させる気がないのだからか……。

それとも、なにか意図があるのか……

考えても分からなかったので、炭治郎くんを励ましつつ、一緒に頑張ろうと奮起させておいた。

俺もそのうち、それをやることになるのかな……。

そう思いながらも寝床についた。

その半年後、ついに俺は呼吸法を習得することに成功した。

尚、炭治郎くんはまだ岩を斬れてはいなかった。

やっぱり鱗滝さん、炭治郎くん送り出す気無いんじゃないだろうか……。

山斬と兄弟子と

炭治郎側

鱗滝さんに岩を斬れと言われてから半年が経った。
今まで習ったことを総復習しても岩は斬れない……
切れ目すらも入らないのは、どうしたらいいんだろう……
次第に俺の中に焦りが湧いてくる。

足りない……。鍛錬が足りないんだ……!!
もっと、もっとやらないと……。!!
刀を手に野山を駆け回りながら思う。

俺、ダメなのかな……？ 禰豆子は、あのまま死ぬのか？

わ———っ!!

くじけそう!!! 負けそう!!!!
俺は自身を奮起させるため目的の岩に頭を叩きつけ叫ぶ。

「頑張れ俺!! 頑張れ!!!」
ガンガンと岩に頭を打ち付ける俺に、突如声が掛けられる。

「うるさいっ……!!」
その声に驚いて声の方をみる。
そこには赤色の髪の毛の狐のような面を被った人がいた。
その人は岩の上に腰掛け、俺を見下ろしている。

「男が喚くな、見苦しい」
そう話す男からは、匂いがしない……。
それに、この人いつの間にも!! それにあの狐の面……

「どんな苦しみにも黙って耐えろ。お前が男なら、男に生まれたのなら」

そう言うと、その人はふわりと飛び降り、手に持つ木刀で、いきなり斬りかかってきた。

なっ…!!なんなんだこの人!!!?

俺は慌てて手に持つ真剣でそれを防ぐのだった。



呼吸の訓練も習得し、型もなんとか覚えられた俺は兄弟弟子の炭治郎くんの様子を見に行くことにした。

禰豆子ちゃんは寝たままだし、鱗滝さんは『もう教えることは何も無い』って言われてやるのがなくなってしまったのだ。

食料を集めに行きがてら、炭治郎くんの様子を見に行こうと思い、俺は外に出た。

確か、炭治郎くんが今修行してるところはあの辺だったよな…………。

さてさて、どんな感じになってるか…………

近づいてみると、炭治郎くんは何者かと戦っていた。

それは、狐の面を被った男……のようなヤツだった。

炭治郎くんが必死に防御するのに対して相手は余裕が見える。

敵襲か…!?!と、身構えたところでクイと袖を何者かに引かれる。

驚いて振り向くと、そこには同じく狐の顔を顔の半分程まで被った少女がいた。

全く気配を感じなかった……。それにこの子からは生気が感じられない…………

「大丈夫、錆兎は、あの子襲ってる訳じゃない」

少女に言われて、再び炭治郎くんの方を見る。

言われてみると、確かにサビトと呼ばれた男には殺気は感じられなかった。

「錆兎は、焦るあの子を見兼ねて手伝いに来たんだ。私もね」

…… そうか、炭治郎くんは焦ってた。岩が全然斬れないって、斬れる気がしないって……。

きつとこの子達は、それを見てたんだな……。

だから手伝ってくれようとしてくれてたのか。

「そうだったのか、悪い、早とちりした……」

「ううん、貴方があの子といることは知ってた、だからこれを見たらきつと勘違いするって、錆兎も言ってたし…… だからここで待ってたんだ」

なるほどな、だから俺が飛び出す前に止められたのか……。

いつたい、いつから知られてたんだろうか……

「とにかく、錆兎の邪魔はしないであげて？ あなたなら、あの子の岩なんて粉微塵だろうし」

「はは…… は……」

いつたい、どこまで見られてるんでせうか……？

そうして見ていると、向こうは終わったようだ。

見れば、炭治郎くんが気絶させられている……。

「…… 真菰、後は任せるぞ」

「うん」

真菰、そう呼ばれた少女が頷く。

男はその後俺を見て……。

「弟弟子の事、頼みます……………」

そう言つて、ペコリと頭を下げて山の中へ消えていった。
俺が何かを言う時間はなかった……………」

「あの子… 炭治郎を起こさなきゃ」

少女が気絶している炭治郎くんに近寄る。

少しすると、炭治郎くんが目を覚ました。

真菰が気がついて声をかける。

「大丈夫…？」

炭治郎くんは真菰に気がつくとかバカリと起き上がり、言った。

「さっきの見たか？」

そのまま矢継ぎ早に続ける。

「凄い一撃だった！ 無駄な動きが一切ない！！ 本当になに綺麗だった！！ あんなふうになんもなりたくない！！ なるかな？ あんなふうにな……………」

おいおい、女の子にそんなに話しかけたら不味いだろ……………」

しかし真菰は気にした様子もなく……………」

「きつとなれるよ、私が見てあげるもの」

それに見惚れる炭治郎くんも、やっぱ男の子だな……………」

「そういえば、君は誰だ？」

真菰は… 軽く微笑むと自身の名と、錆兎の名を炭治郎くんに教えるのだった。

それからというものの、炭治郎くんは岩のあるところで錆兎と戦っていた。

ボロボロに負けた後は真菰の指導に入る。

変な癖や悪い所を指摘して貰って直していった。

休憩の時には、何故助けしてくれるのかや、どこから来たのかは話してはくれなかった。しかし、よく言っていたのは……………

「私たち、鱗滝さんが大好きなんだ」

この言葉だった。

そして驚いたのは、錆兎と真菰が兄妹ではないということだった。どうやら、二人は元々孤児で、鱗滝さんが拾って育ててくれたそう
だ。

真菰の話ではまだ子供達はいるらしい……………

けど、鱗滝さんのところでそんな奴ら見たことないけど……………

鱗滝さんからも聞いたことも無い……………

…………… まさか、いや、有り得ないよな

嫌な考えが浮かぶが、すぐに振り払った。

その後も、真菰からの指導は続いた……………

そんな日々が続き、錆兎との特訓も数をこなしてきた炭治郎くんは、日に日に動きが良くなっていく。

もう見違える程で、ぎこちない動きが大分消えてきた。

そして、そんな特訓を始めて半年程経った頃……………

遂に…………… 炭治郎くんが錆兎から一本を取る事に成功した。

炭治郎くんの振り下ろした刀が、錆兎の額の面を叩き斬った。

狐の面が割れ、中からその素顔が顔になる。

その顔はとても泣きそうな嬉しそうな、それでいてどこか安心したように微笑んでいた……………

「炭治郎くんやったじゃねえか!!」

俺が賞賛を送ると、横で見っていた真菰も口を開いた。

「…………… 勝ってね、炭治郎。アイツにも」

それを最後に、濃い霧が出てきて周りが何も見えなくなる……………

「なっ…：… なんだこの霧は…：… !!」

慌てて払う、しかし何も見えない。

やがて霧が晴れると、そこには俺と炭治郎くんしかいなかった。

真菰や、錆兎の姿はどこにもなく、そして…：…

炭治郎くんの刀は…：…

アレだけ苦労していた岩を…：…

見事に真つ二つに…：… 斬れて割れていた

選別資格と幻想殺し

side上条

「……………」

斬れて割れた岩を見て、炭治郎くん炭治郎くんが呆けている。

どうやら、自分が斬った実感が湧かないみたいだ。

さて、あんだだけ頑張つて斬つたんだ、褒めてやるか……………」

「炭治郎くん、やったな!! ようやく岩が斬れた!! 凄いじゃねえか」

「えっ……? いえ、でも俺は……錆兎の面を割つただけなのは
ず……………」

どうやら納得がいつてないみたいだな、ここは一つ、歳上として話してやるか

「それは違うぞ炭治郎くん、これは間違いなく炭治郎くんが斬つたんだ。錆兎が斬つた訳でも、ましてや俺が斬つた訳でもない。炭治郎くん。お前の斬撃は、確かに岩を斬つたんだよ。それは誇つていい」

そうして、歳上として俺が炭治郎くんを諭していると、足音が近づいて来るのが聞こえた。

ふと、後ろを振り返ると……そこには天狗の面を被つた翁。鱗滝さんが立っていた。

「岩を……斬つたか」

そう言うと、鱗滝さんはポツリポツリと話し始めた。

「お前を最終選別に行かせるつもりはなかった。もう、子供が死ぬのを見たくなかった……。お前に、あの岩は斬れないと思つていたのに…… よく頑張つた。炭治郎、お前は…… 凄い子だ……………」

そう言つて鱗滝さんは炭治郎くんの頭を撫でていた。

その声はとても優しい声音だった。
撫でられている炭治郎くん本人も、ポロポロと泣いている。
そして、鱗滝さんは炭治郎くんを抱きしめ言う。

「最終選別」 必ず生きて戻れ……。儂も妹も、此処で待っている」
そして、炭治郎くんから離れ、俺を見ていう。

「当麻、これはお前にも言えることだ。絶対に、生きて戻ってこい」
そう言うのと、鱗滝さんは俺に手を差し伸べてきた。
俺は応えるようにその手を取り、握手を交わす。

「ああ、分かっていますよ。必ず、炭治郎くんと一緒に帰ってきます!!」
こうして、俺たちは最終選別に行く資格を得た。



二年という時間で伸び放題伸びた髪を、鱗滝さんは綺麗に整えてくれた。

俺たちに、水を型どった羽織りを着せ、炭治郎には日輪刀を貸し与えてくれた。

準備を整えた俺たちは禰豆子ちゃんを鱗滝さんに預け、最終選別へと向かうこととなった。

「じゃあ、鱗滝さん行ってきます…。」

「行ってきます鱗滝さん!! 錆兎さびとまこも真菰まこも によろしく!!」
そう声をかけ、俺たちは狭霧山を降りていくのだった。

「……………」 炭治郎、なぜお前が… 死んだあの子たちの名を知っている…。」

鱗滝さんに、微かな疑問を残して……。

手鬼と幻想殺し

side上条

俺達が藤襲山に着いた時、もう既に着いている者たちが数人いた。誰も彼も、その表情は硬い…………。

しばらく待っている、二人のおかつぱ頭の少女が二人出てきて説明してくれた。

最終選別はこの山の中を七日間サバイバルして生き残る事なんだそうさ。

しかし、ただのサバイバルじゃない…………

鬼が跋扈するこの山の中を七日間生き残らなければならぬんだそうさ。

山から鬼が逃げ出さないかを心配したんだが、それは山の麓から中腹に掛けて、藤の花が咲き乱れて鬼を閉じ込めているのだそうさ。

鬼が藤の花に弱いことは知らなかったな…………

そんなことを思いながら、俺達は共に山の中へと入っていくのだった…………。



山に入った俺達を待ち受けていたのは二体の鬼だった。

血走った目で俺達目掛けて襲いかかってくる。

『全集中・水の呼吸!! 肆の型 打ち潮!!』

だが、そこは二年の鍛錬を続けてきた炭治郎くん、慌てずに二体の鬼の頸を斬り落とした。

そうして斬り殺して、服だけが残った鬼たちに、炭治郎くんは祈っていた。

「……やるじゃんか、炭治郎くん」

「はい!! 行きましよう、上条さん!!」

そうして、俺達が奥に進み始めたその時だった。

「っ……!!」

炭治郎くんが突如思いっきり鼻をつまんで顔を顰めた。

「ど、どうした? 急に変顔なんかして……」

「か、上条さん…… 凄く、何かが匂うんです。何か…… 腐ったような匂いが……」

匂い……? 俺には何も感じないが……

すると、暗がりから一人の少年が走ってきた。

「うわああアアツツ……!!!」

その少年は背後を気にしながら走り叫ぶ。

「なんで大型の異形がいるんだよツ!! 聞いてない!! こんな……!!」

その少年視線を追ってみれば……

ズルツ

見上げる程の巨体に手を幾つも生やした、気味の悪い怪物だった。

その手のひとつには生気を感じられない少年が首を掴まれぶら下がっている

その鬼は、身体から生える複数の腕を更に伸ばして、走る少年目掛けて突き出した。

なっ…… あのままアイツ!?

オレはすぐさま駆け出し、少年と腕の間に割り込み右手を突き出し

た。

「パキイイインツ!!」

ガラスの割れるような音が響くと、奴が伸ばしていた腕が根元まで消し飛んだ。

「!! 俺の腕がアアアツ!!!」

絶叫するその化物を他所に、俺は少年に叫ぶ。

「そこのおまえ！ 何してる！早く逃げろ!!」

「っ!! あ、ありがとう!!」

少年はそのまま走り去っていった。

それを見届けて、俺は化物に向き直る。

コイツをこのまま放置しておいたら、もっと犠牲者が出る……………。
そうなる前に、ここで仕留める!!

「…………… 来たな？ 俺の… 可愛い狐たちが」

「上条さん!!」

そこに炭治郎くんが並び立つ。

「炭治郎くん、コイツを倒すぞ!!」

「っ!! はい…!!」

こうして、最終選別の俺と炭治郎くんの激戦の幕が切って落とされた

手と刀と幻想殺し

炭治朗側

「狐小僧ども、今は… 明治何年だ？」

手だらけの鬼が不意に問いかけてくる。

「!? …… 今は大正時代だ」

俺の返答に、鬼はその雰囲気をごわつかせた……………。

少しざわついた後、突然そいつは叫び出した。

「アアアアアアツ!!」

「年号がアッ!! 年号が変わっている!!!」

「まただ!!! また!! 俺がこんなところに閉じ込められている間に…!!!」

「アアアアア!!! 許さん!!許さんん!!!」

「鱗滝め! 鱗滝め!! 鱗滝め!!! 鱗滝めえ!!!!」

なんで… なんでこいつがその名前を…!ツ!!

「どうして鱗滝さんの名前を……………」

そう問いかけると、鬼は食い気味に答えた。

「font:91」知ってるさア なにせ、俺を捕まえたのは鱗滝だからなア」

「忘れもしない四十七年前!!」

「アイツがまだ鬼狩りをしていた頃だ。江戸時代… 慶応の頃だった!!!」

「なんだって!? 鬼狩り… 江戸時代!?

「へえ、偉く長生きだな、鬼つてのは、不老不死なのか?」

そう口を挟んだのは上条さん。

「鬼には寿命がない、あるのは鬼狩りに狩られて死ぬか、太陽で死ぬか、飢えて死ぬか、後はあの方に殺されて死ぬかのどれかだ」

「そんな… だとしたら鬼はいつたいつの頃から生きてるんだ!?」

「殺されるしか死ぬ方法はないわけか、なら、俺が狩つてやるよ、今こころで!!」

「やれるものならやってみろ!! デカイ方の狐小僧!!」

その言葉と共に鬼は手を伸ばして上条さんに迫る。

上条さんはそれを難なく躲しながら、時折右手を突き出してその手を掻き消している。

俺も、俺も動かないと!!

そう思っただけ動き出そうとした時だった。

「十二… 十三… お前たち合わせて十五だ」

嫌な予感がしてすぐさま問掛ける。

「!? なんの話だ!!!」

そして鬼はなんの躊躇いも無ったが……

奴は平然と言っただけだ。

「俺が喰った鱗滝の弟子の数だよ。アイツの弟子はみんな殺してやるって決めてるんだ」

クスクスといやらしく笑いながら話続ける鬼……

「そうだなア、特に印象に残ってるのは、二人だ。あの二人……」

「珍しい毛色のガキだったな、一番強かった、赤色の髪をした、口に傷がある」

「もう一人は花柄の着物で女のガキだった。小さいし力もなかった

が、すばしっこかった…」

「っ!? この鬼に殺されていた? いや、でもあの二人は……」

「目印なんだよ、その狐の面がな……。鱗滝が彫った面の木目を俺は覚えてる。アイツが着けてた天狗の面と同じ彫り方……」

「“厄除の面”とか言ったか? それをつけてるせいで皆食われた。俺の腹の中だ鱗滝が殺したようなもんだ……!」

「フッフッフッフッこれを言った時女のガキは泣いてたなあ、フッフッフ」

「その後すぐに動きがガタガタになったからな、フッフッフッフッ……」

「手足を引き千切つ……。もう黙れよクソ手野郎……」なに……?」

それを遮ったのは上条さんだった。

その声はとても低く響く声で耳が普通の俺でもすぐに理解出来た……。

上条さんは今……。とても怒っている。

「黙って聞いてりやさつきからペラペラ……。鱗滝さんが何したってんだ……。錆兎が、真菰が、他の子供たちが……。!! お前に……。お前に正義はねえのかよ!! 子供たちを何人も殺して……。!! 恨むから殺す!? 冗談じゃねえ!! 誰がお前なんかに殺されたいもんかよ!! 喰われないかよ!! そんな……。そんな自分の事しか考えられないってんなら……。いいぜ? まずはそのふざけた幻想をこの右手でぶち殺す!!」

そう言っ走り出した上条さんに合わせる様に、俺も駆け出す。

俺も上条さんと同じ考えだった。

コイツは、このまま放置していたら、きつと鱗滝さんは育手を続けたいはられない……。

コイツは……。ここで斬る!!

俺に気がついた鬼は、俺の方にも大量に手を伸ばしてきた。

それを走りながら切り刻む。

俺は、不思議と落ち着いていた…。あのような事を言われたら怒って落ち着いてはられないはずなのに……

けど、きつとそれは…。上条さんがあんなに怒ってくれているからだ……。

上条さんが、俺の…。いや、俺達の言いたいことを言ってくれたからこそ、落ち着いていられる。

きつと、あの人がいなくなったら、俺は今頃怒り狂ってコイツに斬りかかり、殺されていたかもしれない……。

迫り来る手を斬り刻みながら進むが、どれだけ斬っても少し経つと元通り…。いや、それより増えている……。

これじゃ、キリがな…ん!?

土から、変な匂いがする!!

異変を感じ取った俺は、その場から力一杯跳躍する。

——刹那、地中から幾つもの手が突き出してきた。

鬼はさっきの一撃で終わらせるつもりだったのだろう、一瞬だけ動揺するが、すぐさま空中にいる俺目掛けて別の手を伸ばしてくる。

くっ…。こんなもの…!!

俺が迎撃しようとして頭を逸らそうとしたその時だった。

「オオオオオオオオオツ…!!」

突然跳びがった上条さんがその手を『左手』で殴り飛ばした。

殴られた事で勢いが弱まった腕を足場に俺は駆ける!!

「行け!! 炭治郎!!」

「っ…。はい!!」

上条さんの言葉を背に俺は鬼の頸目掛けて走る。

『全集中・水の呼吸』

手を足場に跳躍し、一息に奴の頸元まで跳ぶ。

そして、捉えた!! 隙の糸!!

ピンと張り詰めたその糸を手繰るように俺は刀を振るう

「あああああッ!!!」

『壺の方 水面斬り!!!』

斬ッ!!!という音と共に、鬼の頸は斬り落とされ地面に落ちた.....!!。

こうして、俺達はなんとか異形の鬼、手鬼を撃破することに成功するのだった.....。

選別終了

side 上条

風の鳴る音がする……………。

炭治郎くんの振りかぶる刀から水のようなエフェクトが溢れ、手鬼の頸を斬り落とす。

まるで柔らかい物でも斬るかのようにあっさりと斬り落とされ地面を転がる鬼の頸。

アレだけ異形であった身体の方は、すぐさま塵となり消えていった。

落とされた頸の方は、憎々しげに俺と炭治郎くんを見ている。

炭治郎くんはそつと刀を鞘へと仕舞うと、その頸の方を見た。

その顔は、怒りや憎しみ……………はたまた見下したようなものではなく、憐れみだった……………。

きつと、この鬼がこうなってしまったことを憐れんでいるんだろう……………。

そうしている間に、頸の方も少しずつ塵と化していつている。

炭治郎くんはそれに近づくと、その伸ばされている手に触れる。

「…………… 上条さん……………」

不意に炭治郎くんと呼ばれ、俺もその頸に近づく。

そして、炭治郎くんとは別の、空いている指に手を触れ握る。

そうだよな…………… コイツだって、こうなりたくてなったんじゃない……………。

元は人間として幸せに生きていたんだ。

人を殺して喰ったことは許されることではない……………。

けど、せめて来世では…………… 鬼になんてならない幸せな人生を送ってほしい。

そう、願わずにはいられなかった……………。

程なくして、落ちた鬼の頸はポロポロ涙を流しながら、塵となって

消えていった……。

…… 終わったんだな…… これで……。

真菰、錆兎、それに、他の兄弟子姉弟子も……。終わったぞ……。もう、安心して帰ってくれ、鱗滝さんのもとに……。

そうして、七日間に及ぶ選別は終了した。

◆◆◆ side change ◆◆◆

七日後…… 早朝

「お帰りなさいませ」

「おめでとうございます。ご無事で何よりです」

上条さんと戻ってきた俺たちは周りを見て驚く。

そこにいたのは俺たちを含めても五人しかいなかった。

最初は二十人近くいたのに……。

「一部の方達は辞退されて帰られました……」

辞めた……。それほどに選別は厳しいものだったんだ……。

「あんだけ居てもここまで減るんだな……。つてか隣のヤツブツブツ言つてて怖いんだけど……」

そう言われてみれば……。何やらやけに髪色の明るい人が何やら小さくずっと何かを話してる。

「まずは隊服を支給させていただきます。身体の寸法を測り、その後は階級を刻ませて頂きます」

「階級は全部で十段階ございます。甲・乙・丙・戊・己・辛・壬・癸……。

今現在皆様は一番下の癸みずのとでございます」

「刀は？」

「本日中に玉鋼を選んで頂き、刀が出来上がるまで十日から十五日と
なります」

「更に今からは鎧鴉をつけさせていただきます」

そう言うのと白髪の子の方が手を数度叩く

《カアアアツー!!》

すると空から数羽のカラス達が降りてきて、俺たちの肩に一羽ずつ
止まった。

「え？ 鴉？ これ… 雀じゃね？」

さっきの人が何か言ってるけど、何か違うんだろうか……

「鎧鴉は主に連絡用の鴉でございます」

黒髪の子が説明をしていた時だった。

バシツ!! と音のした直後、《ギヤアツ!!》と、カラスの悲鳴が聞こ
えきた。

見ると先程からずっと刀 カタナと言っている目つきの悪い人が
イラついたようにカラスを振り払っていた。

そのまま白髪の子の方に手を伸ばす……が

「パシツ おい、それ以上はやめとけよ、度が過ぎるぞ」

上条さんがそれを止めていた。

「ああ？ なんだテメエは、やるってのか!!」

「聞けないのか？ なら選べ、今この場で俺に再起不能にされるか、大
人しく待つてるか……」

そう言つて上条さんが鋭くその人を睨む。

それと共に周りの空気がグツと冷え込む感覚が俺を襲つた。

これは、殺気だ……!! 俺に向けて出されてる訳でもないのにここまでなんて……

「チツ……わかつた」

その人もこれは堪えたのか、少し顔を青くしながら引き下がった。

「……悪い、話の邪魔しちゃつた」

「大丈夫です。ではあちらから、刀を造る鋼を選んでくださいませ」

「鬼を滅殺し、己の身を守る刀の鋼は、御自身で選ぶのです」

そう言つと、黒髪の子が木の台の上に乗せられている石を見て告げた。

あの石から……刀が……

「あ、あのお……すまん、ちよつといいか……?」

そんな中不意に上条さんが声を上げる。

「? なんでしょう」

すると上条さんが白髪の子に耳打ちで何かを呟いた

「……かしこまりました。では、少し相談した後、連絡しましょう」

「なんか……すみません……」

なんの話しをしてたんだろう……

それと、さつき金髪の人が……

『えっ……嘘でしょそんなの通るの……?』つて呟いてたけどなんだつたんだろうか……

兄妹の再開

side 上条

選別の帰り道、俺は動けなくなった炭治郎くんを背負って狭霧山への道を歩いていた。

「……すみません……上条さん……」

「気にすんな、頑張ってた歳下を労るのは歳上の役目だからな」

背中の上で申し訳なさそうに炭治郎くんが話す。

そう、気にしなくてもいい。炭治郎くんは頑張っていた。禰豆子ちゃんを人間に戻す方法を鬼たちから聞こうとしていたし、手鬼との戦いでは他の参加者を守ろうと奮戦もしていた。

そんな優しい子に、ボロボロの状態で歩けと言うほど俺は薄情じゃない。にしても……

「ちよつとだけ、甘かったか……」

「えっ……?」

俺の呟きに炭治郎くんが反応する。

「いや、結局あそこの鬼たちからは何の収穫も得られなかっただろ? だから甘かったって……」

「はい……。八人の鬼たち全員……まともに話をできるような状態じゃありませんでした……」

「問答無用だったよな……。余程飢えてたらしい」

下手に問いかけようとしたら俺たちが喰われていた。

「少し休んでていいぞ？ 着く頃にはまた教えるから」

「すみません…。少しだけ…。休みます…」

それを最後に背中からは寝息が聞こえるだけになった……。それを聞きながら俺は狭霧山へと歩を進めるのだった。



そうして暫く歩いて狭霧山の鱗滝さんの住む小屋付近までたどり着いた。

「と、炭治郎くん？ そろそろ到着だぞ？」

「ん……」

起きないな…。深い眠りに入っちゃまってみたいだ
着いたら起こしてやるくらいでいいか……

そう思い歩を進めていると、鱗滝さんの小屋が見えてきた。
やっと着いたな…。この時代は移動手段が歩きしかないから時間が掛かってしょうがない……

そんなことを思いながら小屋に向かって歩いていると、小屋の扉がいきなり蹴り飛ばされて吹っ飛んだ。

何事かと足を止めると、その中から彌豆子ちゃんがテテテ…と出てきたのだ。

「あ———っ!! 彌豆子オ お前っ… 起きたのかあ!!」

「うおっ…!? 炭治郎くん起きたのか……」

急に耳元で大声を出すなよビックリするだろうが……

「あつ… すみません…」

あ、しよぼくれた…。

そんなやり取りをしていると、禰豆子ちゃんがこちらに気がついたのか、俺たちの方に駆け寄ってくる。

それに気がついて俺は炭治郎くんを降ろしてやる
すると禰豆子ちゃんは炭治郎くんを駆け寄り、その身体を抱きしめた。

炭治郎くんもそれに感極まったのか…。

「わ——っ お前 なんで急に寝るんだよオ!! ずっと起きない
でさあ!! 死ぬかと思っただろうがあ!!」

泣きながら叫んでいる。

良かったな… 炭治郎くん。

そう思い二人を眺めていると、禰豆子ちゃんがヌツと腕を伸ばしてきて俺も抱きしめた。

「お、おい禰豆子ちゃん? 俺はいいだろ別に」

「むう…」

フルフルと首を横に振られたんだが…。

「禰豆子はお前のことも心配していたのだ… 当麻」

その声と共に更に上から腕が伸びてきて俺たちを抱きしめた。

「よく生きて戻った!!!」

鱗滝さんの優しい手に抱かれ、そうしてようやく実感した。

やっと、帰ってこれたんだと…。

俺たちは、無事に最終選別を突破した